令和５年３月28日発行（毎月１回28日発行）通巻676号

月刊 心技体 人を育てる総合誌

武道

MONTHLY MAGAZINE THE“BUDO”

APR. 2023
4
VOL. 676

巻頭カラー
巻頭リレーエッセイ　坂東眞理子
世界の城塞　若月伸一

新連載
カラーグラフ 武道人の肖像　たかはししじゅんいち
カラーグラフ 武の彫刻　佐々木香輔

好評連載
歴史と未来のはざまで――新田一郎
自己を磨く―武道の地平線――西平　直
私の修業時代――合気道　和田　昭
残心の哲学――アレキサンダー・ベネット
武道の可能性を探る――秋乃ろーざ
無我夢中―柔道に育てられて―　柏崎克彦
世界武術紀行――寒川恒夫
私の稽古法――相撲　矢島健一

東京都 大田区

随筆

私にとっての生涯柔道、残された課題

日本マスターズ柔道協会　会長　吉成（よしなり）　隆杜（たかと）

オリンピックを筆頭に国体、インターハイなど、大半のスポーツイベントは、参加する選手のほとんどが、20代、30代の若者を対象としたものになっています。しかし、世界全体の経済成長と医療の普及によって平均寿命が伸び、地球の人口は80億を超え、平均寿命も大幅に伸びました。この伸びた人生を如何（いか）に生きるべきか、健康でより充実したものにするにはどうすればよいか、という思いが各スポーツ界で大きな力となり、柔道の世界にもマスターズ柔道家による「生涯柔道」という概念が生まれました。

マスターズ柔道の発端は、年齢を重ねた柔道家のための大会がカナダの柔道愛好家を中心に企画され、１９９９年に第1回世界マスターズ柔道大会がカナダのウェランド市で開催されました。それに続いて毎年、世界各地で大会が開催され、２００３年には第５回大会が講道館で開催されました。

各大会に日本の柔道家が毎年数多く参加していたことから、日本での大会をきっかけに日本マスターズ協会が設立され、04年に第1回日本マスターズ柔道大会を静岡県で開催する運びとなり、以後毎年、全国各地で大会が開催されました。年々参加する選手も増え、若かりし頃に日本選手権をはじめ大きな大会に出場した実績ある選手も参加するようになりました。

この大会が回を重ねるにつれ、今までにない柔道愛好家の交流が生まれ、中高年の柔道家にメダル獲得という新たな目標ができ、試合では若者に負けない闘争心を蘇（よみがえ）らせ、間違いなく多くの柔道家の人生に彩りを加える結果となりました。

私自身、第1回日本マスターズ柔道大会に参加し、それ以降、毎年欠かさず出場を重ね、74歳になった今もメダル獲得を目標に週3回の道場通いが続いています。今年で柔道を始めて61年が経（た）ちましたが、この間ブランクもなく稽古を続けることができたのは、本当に幸運でした。こうした柔道に対する情熱を維持できた環境や、何よりも稽古相手になってくれる仲間に恵まれたことに感謝するしかありません。

一方で、柔道にとって危惧すべき兆候があちこちで現れています。一つは、学校の部活動です。体育系の部活動で、部員の減少率が最も高いのが柔道です。特に中学・高校では柔道部そのものが消滅してしまった学校が増えています。これでは、年々人気が高まっているマスターズ柔道も先が危ぶまれます。

300以上あるオリンピック種目の中でも参加国が3番目に多いのが柔道です。国連加盟国数は193ですが、国際柔道連盟加盟国・地域数は207です。この海外の柔道人気を日本に取り戻すこと、これが私たちマスターズ柔道家に課された責任と考えています。

日本マスターズの仲間たち。前列左端が筆者